

114号 Z_NET「バーニー・サンダースのウクライナ論」

2022年08月03日

August 1, 2022

Z_NEt (Source: Jacobin)

バーニー・サンダースのウクライナ論を聞くべきだ

We Should Have Listened to Bernie Sanders About Ukraine

<https://zcomm.org/znetarticle/we-should-have-listened-to-bernie-sanders-about-ukraine/>

By Ben Burgis

リード

もしバーニー・サンダースがバイデンを破って民主党の指名を受け、大統領選挙に勝っていたら、この2年間はどうなっていただろうか。

例えば、ジョー・マンチンやカーステン・シネマにどう対処していただろうか--。

あるいは、バーニーを上院議員のトップに据えることで、全米の政治はどう変わっていただろうか。

このような疑問に対する答えは、ほとんど推測の域を出ない。

しかし、想定される経過の少なくとも一つの側面については確信を持って語るることができる。

外交政策は、議会勢力の動向とは関係なく、行政府が最も力を持つ分野である。

サンダース大統領ならウクライナの危機にどう対処したかは、我々には十分わかっている。

なぜなら、サンダース上院議員は、ロシアが侵攻する数週間前に、解決に向けた自身の考えを明言していたからだ。

バーニーは2月8日付の『ガーディアン』紙への寄稿で、ウクライナ問題についての考えを述べている。

そして彼は、この5ヶ月の間に起こった悲惨な結果の多くを、正確に予測している。

そして、このような大惨事を回避するために、米国は両国間の交渉に積極的に参加するべきだと主張し促した。我々は耳を傾けるべきであった。

予期せぬ結果

「サンダースは2月に「戦争は意図しない結果をもたらす」と書いている。

差し迫ったロシアのウクライナ侵攻の危険が現実のものとなった場合、大量の民間人の犠牲者、近隣諸国への大規模な難民の移動などが現実のものとなるだろう。

そして計り知れないほどの経済的影響がもたらされるだろうと予測した。彼はいう。「全世界のエネルギー、銀行、食料、一般人の日々のニーズに影響を与えることになるだろう」と。

これらのことは、実際の事実として、これまで何ヶ月もの間、新聞紙面を賑わせてきている。

サンダース氏の予想した危険の中には、あまり目立たない影響もある。

しかし、誰もが夜も眠れなくなるはずの問題、世界的協力システムの危機だ。

地球規模の気候危機と将来のパンデミックという人類の脅威に対処する」ために必要な世界的協力は、主要国間の緊張の高まりによって大きく損なわれている。

そして、最も「恐ろしい」可能性は、こうした緊張がエスカレートして、より大規模な戦争に発展することだと、彼は書いている。

「対ロシア戦争」への転換と展開

バーニーがこの論説を書いたから、その危険性は増すばかりである。

下院軍事委員会のセス・モルトンという。

「我々は、ウクライナ人を支援するためだけに戦争をしているのではない。ロシアとは、多少介入者を挟んでではあるが、根本的に戦争状態にあり、勝つことが重要なのだ」

モルトン議員は慎重に言葉を選んでいるが、その真意は恐るべきものだ。

米国の対ウクライナ軍事援助は、ウクライナの軍事予算総額の何倍にもなっている。

それだけではない。米国の情報筋はニューヨーク・タイムズ紙に、ウクライナ軍がロシアの将軍を暗殺し、ロシアの船を沈めるのを助けていると自慢げに語っている。

このことは、モルトン氏の次の言葉が不気味なほど正確であることを示している。

「この戦争は世界の二大核保有国間の戦争が、介在者（ウクライナ）を通して「多少の小競り合い」として行われている。それだけのことだ。

バーニーならどうしただろうか、バイデンはどうすべきか

サンダースは、差し迫った侵略をためらうことなく非難した。

プーチン大統領を「この危機を招いた最大の責任者」だと明言した。

そして、もしプーチンが計画を実行に移した場合、「プーチンとその関係者」を対象に制裁を行うよう呼びかけた。

しかし同時にサンダースは明言した。道徳的、法的には許せるものではないにしても、ロシアのとった方針の動機は、通常的地政学的判断に基づくものであることも明言した。

なぜならウクライナに対するアメリカの影響力が増大することは、これまで多くの懸念を生んでいたからだ。

忘れてはならない。プーチンと彼の前任者たちは、ずっと以前から、ウクライナについて懸念を表明していた。米国が影響力を増大し、ウクライナがNATOに加盟する可能性が強まっていたからである。

いまや、ロシアが“プーチン大統領の個人的な誇大妄想”にとどまらない、然るべき動機を持っていると示唆するならば、そのような人は、プーチン擁護論者として公共のレッテルを貼られてしまう。

例えば、ノーム・チョムスキーに対する広範な非難がそうである。

それは危険なほど見当違いである。

「プーチン擁護者だ」という非難は、一方のイデオロギー的な適合性を強調するために、並行して使われる論法だ。

いま最も根源的な問題は、二大核保有国の間接的な対立がますます激化し、地球全体が危険にさらされているということだ。

それを解決するために、行為者の行動の原因を地政学的に理解しようとすることは、その行為者の行為が道徳的に正当であると主張することと同じではない。

中略

バーニーはこの論説の最後でこう語りかける。

忘れないでほしい。この地域で戦争が起これば、悲惨なことになるということ。

アメリカは懸命に取り組むべきだ。現実的で、互いに合意できる解決策を打ち出すこと。それはウクライナ、ロシア、米国、欧州の同盟国が受け入れられるものでなくてはならない。

そのような努力を通じてこそ、第二次大戦後の75年で最悪の「欧州戦争」は防がれるということを肝に銘じてほしい。

最後に

どうせプーチンは納得のいく交渉による解決には応じないのだから、そんなことはどうでもいいという意見もよく聞かれる。

しかし、米国はウクライナの軍隊を武装し、資金を供給している主要国であり、ロシアに対する経済制裁の旗振り役でもある。

バイデンは圧倒的に大きな影響力を持っている。

そのバイデンが、「交渉がうまくいかないかもしれないから、交渉に挑むべきでない」という結論を導くのはおよそ無茶な話だ。

もしサンダースが大統領だったら、彼は和平を試みただろう。その努力は成功しなかったかもしれない。

しかし、いまバイデンは、世界中に破滅をもたらしている代理戦争に何百億ドルも注ぎ込んでいる。その前に、調停を試みることさえしなかったのはまことに腹立たしい。

この5カ月で死んだ何千人もの人々は、生き返ることができない。

ロシアの爆撃で失われたウクライナ人の手足は、元通りにすることはできない。

しかし、世界の食糧危機を緩和するために、ウクライナの戦争がより大きな紛争に発展する可能性を排除するために。

もし戦争があと5カ月か5年続いたら、命を落とすことになるだろうウクライナの市民とウクライナとロシアの兵士たちを救うことだ。

バイデンが2月のバーニーのアドバイスを受け、その地に平和のチャンスを与えることが、世界にはきわめて重要なのだ。

